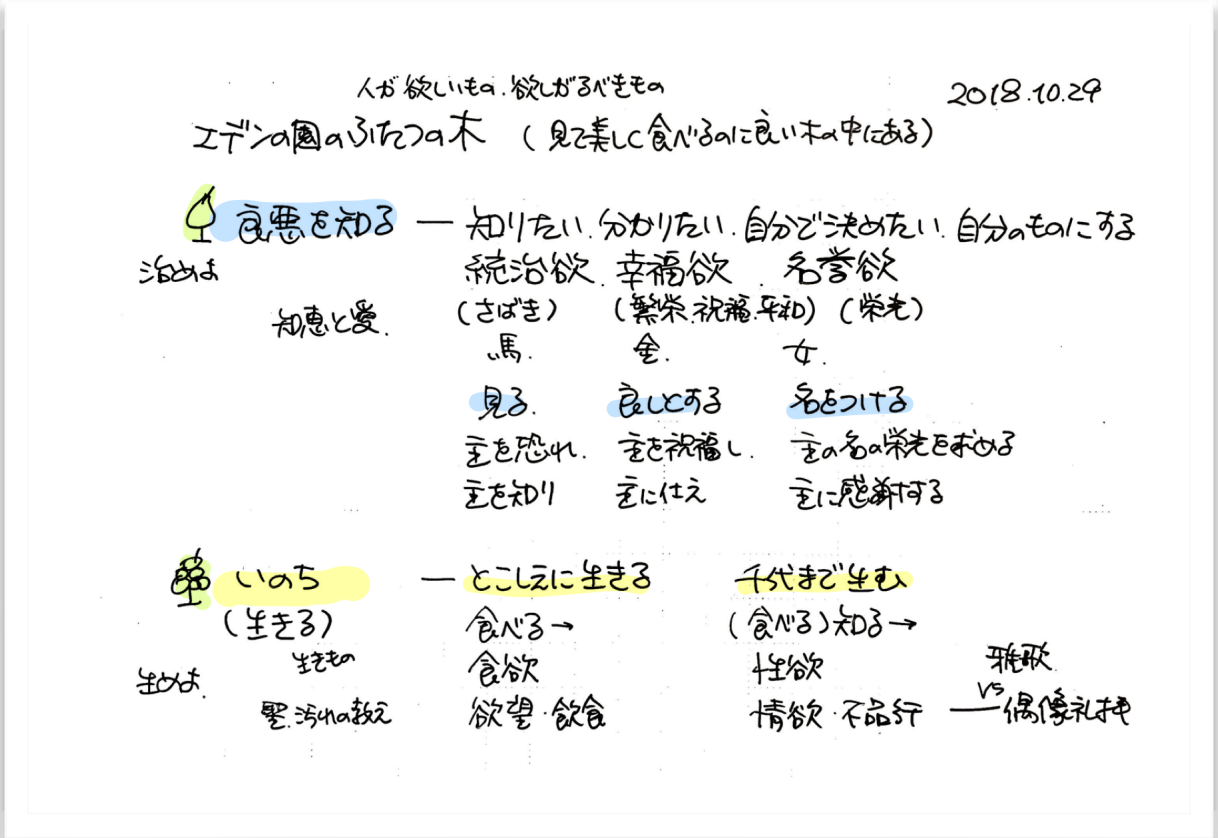
エデンの園のふたつの木



エデンの園のふたつの名前のある木。エデンの園には見て美しく食べるのに良いすべての木がありましたけれど、その園の中央に「いのちの木」、そして、「善悪を知る木」がありました。その「いのちの木」と「善悪を知る木」というものはどういうものなのかということを区別していましたね。

このふたつの木は、人が欲しいものなのです。欲しがるものということと同時に、欲しがるべきもの。神様がこれがふたつの宝ですと言って与えようとしているもの、そのふたつだということです。

その目的は、「我々に似るように、我々のかたちに人を造って、この地を従わせ、治めさせ、生めよ増えよ。」というこの命令を果たすために必要なふたつの富、宝というのが、善悪を知ること、そしていのち。ここには善悪ではなくて、良悪と書いてありますけれど、これは神様は見て良しとされた、良しとされたという創造の最初の1日目、2日目からくるところですね。そのすべては良かったというこの「良い」ということと、善悪の善悪を知る「善」と同じ言葉なので、良悪と書いてありますけれど、善悪と知るという意味になります。善悪を知るということは、何をしているのかということですけれど、知るというのは、知りたい、わかりたい、自分で決めたい。自分で決めたいというのは、自分のものにしたいというのが、この知るということばの中に入っているものだと思います。

4章の最初にあります「人はその妻エバを知った」この知る(4:1)、妻を知る(4:17)という言い方と善悪を知るということが同じです。ですから、自分のものにする、自分で決めるという意味で善悪をさばくもの、何が善人で、誰が悪人でということを決めるということが、王様が治める、支配する、統治するということは、それをしているということです。わかって、平安で、繁栄して祝福されていると。祝福されたい、平和になりたい、病気などもないわけですね。幸いになりたい欲望もあります。それで、もう一つ善悪を知るというところに入ってくるのですけれど、名誉ですね。栄光があらわされる。これも善悪を知るということにつながっているものだと思います。

善と悪、善人悪人をさばく、治めるのは、王様の知恵ですので、申命記で王様が集めてはいけないものとして、馬と金と女ということを言います。馬はさばきの王の王であること。金は繁栄をあらわし、女を集めることは、名誉、栄光を求めているという3つの枠組みで見ることができると思います。

神様に似たものということですので、創造の順番の「神様は見て、それを良しとされて、名前をつける」「見る、良しとする、名前をつける」これも、「見てさばく、祝福する・良しとする、名をつける・主の名の栄光があらわされる」という3つの側面で、ここで言われているのではないかと思います。「主を恐れ、主を祝福し、主の名の栄光を求める」、「主を知って、主に仕え、主に感謝する」これが、善悪を知っているということのいろいろなあらわれです。

知恵と愛ということですかね。知って…女を知るということは愛しているということですよね。相手を知りたい、わかりたい、自分のものにしたい、仕えたい。これが、愛しているというようなことですので、こちら(良悪を知る)は治める、神様のしもべとして王様が治めるということを本来欲しがるべきもの。「何が欲しいか願え。」と言われたときに、王様が答えなければいけないのが、「善悪をさばく知恵をください。」と求めなくてはいけない。それをする人には、いのちを与えます。

いのちを与えますということなのですが、いのちには2つの面があります。とこしえに生きる、いのちが長く続く、死にませんという「とこしえに生きる」ということと、「千代まで生み続ける、千代まで種が実を結び続ける」ということで、枯れないことと、実を結んでいくこと。この2つが生きるということ。いのちの木の「いのち」といったときに、1つのことよりも、2つのことを表していると思います。

被造物を見てもそうですね。水の生きもの、空の生きもの、地の生きもの。生きものは、だいたい食べることと生むことの人生？動物生を全うするのは、この2つしかないような感じです。食べて生きる、知って生まれるということなので、生理的欲求という意味では、食欲と性欲。この食べて生きたい、次の世代を生みたいという欲しがるべきものですね。

正しい欲望、正しく求めるべきものを曲げているのが、欲望。欲望と言ったときに、飲み食いする、情欲、不品行。この欲望と情欲がそのまま偶像礼拝だとコロサイの手紙の中で言われたりしますけれど、この善悪を自分で決めて、自分でいのちを得る。自分で次の代を得ようとする。これが偶像礼拝です。神様を捨てて、このこと(食べる、知る)を求めるというのが偶像礼拝なのです。主を恐れて生きる、これが本来の人間に与えられている「いのちの木」というものの教えです。

ですから、聖さ・汚れと戦うところ、正しさを守る。正しさ(良悪を知る)と聖さ(いのち)という意味で、王が守るべきもの(良悪を知る)、祭司が守るべき領域(いのち)ということで、「生めよ。増えよ地を満たせ。(いのち)」「地を従えよ。支配せよ。(良悪を知

る)」というふたつの力を求めるべきもの。宝である。神様のかたちとして与えられている特別なものということで、エデンの園にふたつの木があるということだと思います。